猫が顔を洗った日

佐奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫が顔を洗った日

【Ｎコード】
Ｎ７２１８Ｘ

【作者名】
佐奈

【あらすじ】
異世界トリップもの。
気がついたら猫の姿になっていたけど、戻れるの？　っていうか、あのレポートはどうなったの！？　といった感じの子が主人公の話。

001

水面に映る姿、それは何度確認しても猫の姿。
思い違いでも、妄想でも無くて私は人間だったはずなのにと猫の前足で水面を叩く。その衝撃で歪んだ水面が再び静まり返り、鏡の様にまた姿をはっきりと映し出してもそこに映るのは猫の姿。
悪い夢だろうかと視界の端で揺れていた尻尾をぎゅっと自分で踏みつけてみれば痛みが伝わる。思わず叫んだ声は痛いではなくてふぎゃーという猫の鳴き声。
遠慮なく、力の限り踏み込んだものだから、その痛みはかなりのもので猫になってしまった少女……綾子は地面にうずくまる。

どうしてこうなったのか、何が起こったのか、何一つ思いだせない。
綾子は家で週末が提出期限となっていたレポートを片付けている途中だったところまでは記憶があるのだが、完成させた覚えも無く気がついたらこの場に座っていたのだ、そう猫の姿で。
だからこそ、これは夢かと疑ったのだが先ほどの尻尾に自ら加えた痛みによってこれは夢ではないのかもしれないという思いの方が強くなっている。
しかし、これが夢ではなかったとするならここはどこなのか、そんな疑問が生まれた。見渡す限り自然に覆われた世界、空を見上げても見慣れた背の高い建物は存在していない。空にも雲が浮かぶだけで飛行機が飛ぶ気配も無かった。
『それにしても、レポートどうしよう』
綾子は喋っているつもりだが、その呟きは可愛らしい猫の鳴き声にしかならない。猫になっていること、言葉が喋られないこと、そんなことよりも目下の問題は作成途中であるだろうレポートのこと。
今年の春に大学生となり、大学生生活のペースをようやく掴みな

がらも時折怒涛のごとく出される課題やレポートの〆切には毎度てんてこ舞いだ。今回のレポートだって、それを提出しなければ学期末の試験を受ける権利をはく奪するなんて担当講師が言うものだから必死になって資料を調べあげ後はそれをまとめるだけという所までこぎつけたというのに……

『心配することはもっとあるんだろうけど、あの単位落とすわけにはいかないのに』

これが興味があって取った講義ならまだいい、レポート提出の求められている講義は綾子の学科では必須でもし一回生で単位を取得できなければ、来年度からは別校地が主な学び舎となってしまう為その講義の為だけに移動時間を割かなければならないのだ。そうなると、必然的に受けられない講義も出てきて最悪留年なんてことも考えられる。

本当に夢なら覚めて欲しい、そんなことを考えながら空を見上げているとゆったりと流れてゆく雲に誘われる様に瞼が重くなってきた。暖かい気候に心地よい風、そういえば昔屋根に干した布団の上で寝転ぶのが好きだったなと、そんなことを思い出しながら綾子の意識は落ちていく。

「おや？　珍しい、こんなところにネコがいる」

泉に通じる道から姿を現したのは一人の青年。その手には厚い本が抱えられもう片手は腰に携えられた剣に掛けられていた。その青年の少し後方には控えるようにして軽装ではあるが鎧を着た男が立っている。

「ネコは神殿が保護しているものじゃなかったか？」

生まれた家柄上、実物を見たことは何度もあるが、こうして眠っている姿を見るのは初めてだ。神殿で見るネコはどこかすましていて可愛げが無かったが、このネコは可愛らしいと青年は気配を消してネコの眠りを邪魔せぬようにしながら傍にしゃがみ込む。

「だが紋章をつけておらぬな」
少し長めの毛に隠れているのだろうかと確認をしてみたが首にはこの国のネコであるという証の紋章入りの首輪は付けられていない。
眠りの中で、ネコは触られたことに気付いたのかむずがるように一つ鳴き、そして最初は確認の為に触れていたはずなのにその毛並みの良さに撫で続けていた青年の手に擦り寄る素振りをみせる。
「皆、お前ぐらい可愛げがあればいいのにな」
可愛いじゃないかと無意識のうちに擦り寄ってきたネコの顎をなでればゴロゴロと喉がなった。姿形はネコだが、こんな毛色のネコは見たことがない。紋章を身につけていないからどこから迷い込んだのかは分からないが青年はこのネコを手元に置きたいとそう感じた。今まで神殿に通い続けていたが、今の今までこれだと目のとまるネコはいなかったが、このネコならとそう思うのだ。
青年はそのまま腰を下ろすと、剣は邪魔にならぬよう手の届く範囲へ、本も一旦地面に置き眠るネコをそっと抱き上げ膝の上に乗せた。そうして、少しだけ上半身をひねり地面に置いた本の表紙をめくる。
本を読む傍ら、時にいまだ膝の上で眠り続けるネコを撫でながら心の中で決意する。

002

ふかふかと、ぼんやりと浮上してきた意識の中で足元が柔らかな感触であることを知る。

暖かな陽気に誘われてつい眠ってしまった場所は芝生が茂っていたとはいえ地面でそれなりの硬さだったはずだ。さすがにそこは記憶違いがするはずが無いと綾子が目を開けるとそこはあの泉の近くでは無くて中世の城を思わせる内装の部屋だった。

また知らない間に移動していると立ちあがろうとするが、足元が不安定でそのままよたよたと倒れ込む。もし勝手にこの部屋に入ってしまったのなら、この部屋の主に見つかる前に逃げなければならない。動物好きならいいが、もしアレルギー持ちや嫌いな人が主であったら叩きだされる可能性だってあるのだ。

しかも今、綾子のいる場所はキングサイズはあろうかというベッドの上。これはそうそうに降りてせめて床の上にいた方がいいだろうと綾子はベッドから飛び降りた。

猫の身体なら華麗に着地できるだろうとそう思っていたのだが、猫の姿をしていても所詮中は人の子、怪我はしなかったが着地に失敗してでんぐり返しを二度ほどして漸く止まった。

『……どんくさすぎる』

運動が得意ではなかったが、運動音痴と言われるほど酷いわけでは無かったのにこれは酷過ぎると綾子はがっくりとうなだれる。

言葉も喋ることはできないし、感覚もこの小さな身体にあっているのだから猫特有のあの機敏な動きや柔軟さもあるのではないかと思っていたがどうやら違うようだ。それでも聴覚や嗅覚は人でいたことよりも敏感にはなっているようだが……

『こうなると、窓から逃げるのは無理そうだな』

不用心とでもいうのか、それともこの世界が平和なのか多分テラスへと続いている大きな窓は少しあけられていて、部屋の中には心

地よい風が流れている。猫なら二階程度の高さであれば飛び降りても大丈夫だと考えていたがベッド程度の高さからもまともに飛び降りれないとなればそれは自殺行為でしかない。
せめて隠れていて相手の様子をうかがってから行動を起こした方がいいだろうかとそんなことを考える。もしかしたらこの部屋の主が綾子を運んできた可能性も考えられるのだ。
『いい人だといいんだけど』
唐突に猫になり、きっと知らない場所に自分の知らないうちにきていて、レポートも未完成のまま、これ以上心配事が増えるのは勘弁願いたい。
それにしてもせめて床にとベッドから降りたが、床に敷かれているカーペットもふかふかでここが見た目通り身分の高い人の住まう場所なのではないかとそんなことが頭をよぎる。
改めて部屋の中を見渡して見ると、派手さはないが手の凝った装飾が施された趣味の良い家具に、ゴミ一つ落ちていないふかふかの絨毯、壁に掛けられているのは良し悪しは分からないがそれでも綺麗だとそう思える大きな絵画、重厚感のある机には羽根ペンとインクがセットで置かれ、洒落たブックスタンドに挟まれ分厚い本が並んでいる。その脇には紐で巻かれた羊皮紙が何個か積み上がっていた。
そして、最後に先程まで乗っかっていたベッドを見上げれば天蓋がついていて、ベッドヘッドの上にはこれもまた見事な装飾の施された剣が大小で飾られている。ただの飾りかと思ったが、柄の部分をよく見れば巻かれた布は擦り切れどこか色あせていて、実際に使いこまれている物だとわかった。
『……嫌な予感しかしない』
夢かと思っていて、けれど今自分は確かにこの世界にいるのだと実感して、そして今この世界が自分のいた時代、もしくは世界では無いのだと何となくわかってしまった。
探せば、綾子が囲まれていた文明の機器のない暮らしをしている

国は見つかるかもしれないが、それでもここまでお金をかけることのできる財力を持ちながら昔ながらの生活をするというのは少し考えにくい。部屋の中だけならまだしも、外に視線をやっても電線一つ、背の高いビル一つ見えやしないのだ。

まさかと、思う。一つだけ心当たりがあるのだが、それは息抜き程度で呼んでいたＳＦ小説や映画なんかの中で起こっていることだ。実際にそんなことがあるなんて聞いたことも無いし、実例が残されていたこともない。

そう、綾子の頭に思い浮かんだのは異世界トリップ。何かしらの切っ掛けでそれまでとはかけ離れた世界にとばされることだ。

読んだり見たりするのは楽しいが、それが自分の身に起こったとなれば話は別。ここが異世界となれば言葉は通じるのかとか、一般常識は同じなのかとか、そこから心配しなければならない。

もしかしたら、猫の姿になっているのもこの世界にトリップしてきたことと関係があるのかもしれないが、まずは言葉だと綾子は机の上に並べられている本の背表紙を見ようと必死に立ちあがる。文字が読めれば言葉もわかるかもしれないからだ。

アルファベットの様な、けれど何処か違う印象を与える文字の羅列。

『……えぇと』

文字であるという認識は出来るが読むことはできない。これはやばいかもしれないそんな思いがこみ上げる。相手と意志の疎通を取る為には言葉が通じることが必要になってくるのだから。

それ以前に猫の姿となってしまっていて、人の言葉を話せないのだから文字が読めなければ相手との意志の疎通をとることが格段に難しくなってしまう。

どうしよう、どうしようとその場でうろうろと回っているとがちゃりとドアノブのひねる音が聞こえた。

003

隠れなければ、そう思ったら身体が反応してベッドの下へと隠れていた。

見えないところだからと手は抜かれておらず、清潔さを保ったベッド下は垂れ下ったシーツのおかげできっと高い目線からは死角になるはずだ。伏せの体勢をとって息を殺し扉から入ってくる相手の様子を窺う。

扉が閉まる音は聞こえたが相手の足音は一切聞こえない。このふかふかの絨毯が原因かと小さな前足で何度か叩く。ならば以前よりも聞こえやすくなった耳でと音が僅かでもする方へと集中して耳を動かす。

そうしていると無意識のうちにひげがさわさわと動き、相手の動きで変わる空気の流れを捕えようとしていた。

「あれ、どこに行ったんだ？」

集中していた前方では無くて後方から声が聞こえてきて思わず声が出そうになり、慌てて口を押さえる。だが、どこに行ったのかと言ったのだから今部屋に入ってきた相手が綾子をこの部屋に連れてきたで間違いない様だ。それに、文字は読めなかったが言葉は分かるとなればひとまずは安心だ、どうにかして言葉が分かるのだと言うことを伝えればいい。

声からして青年だとわかるが、相手がどんな人物なのかはわからないが動物に優しくするのだから良い人だろうと綾子は思う。それに、動いた空気に乗って香ってきた匂いは抽象的な言い回しになるが太陽の様な匂いがした。

おーいと今度は足音が聞えてくる、きっとさっきはまだ綾子が眠っているのだろうと考えて足音を立てない様にしていたようだ。綾子は青年だと思われる人の足元に近づきベッド下からここにいるよと、にゃーと一つ鳴く。

「お、こんな所に隠れてたのかい」
青年は鳴き声を聞いて両膝をつくとカーテンの様になっていたシーツをめくりあげて綾子の姿を確認する。そして、その姿を見つけくるりと愛くるしく開いている目に自分が写っているのを見るとその顔に笑みを乗せた。
綾子はと言えば、青年とは予想していたが目の前に現れた碧眼金髪の見た目麗しい姿に思わず目を見開く。海外映画の中でもそう滅多にお目にかかれない様なその顔で、とろけそうな笑みを見せられるとは、人の姿であれば顔が真っ赤になっているに違いないもう一鳴きしようと開きかけていた口が開きっぱなしになったままだ。
「ベッドの寝心地はわるかったのかな」
そっと抱き上げるとその胸に抱いて顎の下を撫でる。動物の扱いになれているのか急に抱きあげられた綾子が不安に感じることは一切なかった。
寝心地が良すぎてもしかして怒られるかと思って隠れたとは思わない様だと間近にある青年の顔を見て綾子はそう思う。しかし、顔もいいが身につけている物も何処か豪奢な印象を受けた。友人に被服関係の学校に行っている子がいるからか、目を肥やす為のウィンドーショッピングに服を作る為の素材選びなんかにもつきあわされていておのずと綾子の目も肥えていった。
あの子がみたら喜びそうだわとたしたしと感触を確かめるように服を撫ぜる。
「僕の名はヴィルヘルム・エル・ヴェストラだ。君の名は？」
伝えられた名前を呼ぶには舌を噛みそうだとか横文字は覚えにくいなどと思っていたが、その自己紹介の続きに答えられてさも当然とばかりに名前を尋ねられ綾子は思わずまた目を見開いた。
「君みたいな子は生まれてこのかた見たことが無いよ」
綾子は泉に映った自分の姿を見て、毛長種の猫だという自覚はあったが、青い目が特徴的な白に近く身体を覆う長い毛足に顔や手足、尻尾と末端だけは濃い茶の色をした猫、たしかヒマラヤンだったは

ずだと猫を飼ったことのない綾子でも分かったことだ。それを見たこともないとはまた珍しいと優しい光を宿しながらじっと見つめてくる綾子の目よりも淡い色をした碧眼を見返す。

「ネコは好かないと思っていたけれど、君なら上手くやれるきがするよ」

確かに猫は気分やとの声をよく聞くが、何か言っている意味が違う気がすると綾子は首を傾げる。好かないといった時の目は何かにうんざりとでも言った様な、嫌悪すら窺いしれた。

「だから、君の名を僕に教えておくれ」

じっと、見つめて来る碧眼。けれど、今の綾子に自分の名を名乗る術は無い。

猫は喋らないとはこちらの常識では通じないのだろうか、と綾子は困ったという感情が伝わる様にその碧眼を見返した。

004

――少し時間を遡る。

ヴィルヘルムは先ほど休憩がてら訪れた泉のそばで見つけたネコ……綾子を抱きかかえて歩いていた。休憩に向かう時には厚い本が抱えられていた腕には見たことも無いネコが抱えられていて、すれ違う者たちは皆、ヴィルヘルムを振り返っている。

それもそのはずだ。ヴィルヘルムには上と下に数人ずつの兄や姉、弟に妹がいる。兄や姉は既に自分のネコを得ているし、弟妹の中には早くも候補を得ている者もいるのにヴィルヘルムにだけは一向に唯一と言えるネコが候補にすら上がらないのが現状だったのだから。

ネコたちはヴィルヘルムの唯一になろうと擦り寄るのだが、どのネコも選ばれずヴィルヘルムもその現状に焦りすら見せずこのままあネコを得ないままなのではないかと言う噂すら流れていた。

「あ、済まないが後でミルクを持ってきてくれないかい」

通りすがったメイドに言付けてそのまま去ってゆく。相手が驚いた顔をしていたがそんなことヴィルヘルムが知ったことではない。今までネコを得なかったのはこれだと思える相手に出会えなかっただけであって、ネコを欲しなかったわけではないのだ。

神殿に保護されているネコは、自分がネコになったと言う誇りからか、それともより良い相手に選ばれようと言う魂胆からか、性格のひねた相手が多かった。時には可愛らしい性格のネコもいたが、それはヴィルヘルムの琴線には触れず確か二番目の兄のネコになったはずだ。

眠っている姿しか見ていないから本当の性格は知れないが、それでも一目見ただけでこのネコだとどこか確信めいた思いがわき上がっていた。

部屋に着くと、ベッドヘッドにもたれ掛けさせていた小さめのクッションを取りネコの眠りを邪魔しない様寝床を整える。
そうして、ゆっくりと自分も腰を据えて未だ眠るネコを見た。
全体的に長く白い毛足に、手足と顔、それから尻尾は濃い茶の見た目。目は何色をしているだろうか、濃い毛並みと同じで茶色か、それとも新緑を映し取る様な緑か、それともお揃いの青だろうか、そんなことを考えながら手触りのよい背を撫でる。
だが、大抵のネコは唯一となった相手と同じ目の色をしているから、きっと青だろうとそんな結論が出されるが、青は青でも海の様に深い青なのか、それとも空の様に抜ける様な青さなのか、はたまた宝石の様な輝きを持つ青なのかと色々な青を思い浮かべた。
「兄さんたちをネコ馬鹿と言ってたけれど、僕もなってしまいそうだね」
まだ何一つ相手のことを知らないのに、既に頭の中はこの傍で眠るネコのことでいっぱいだ。
まだしばらくは戻って来ないつもりであった部屋は締め切られていて、掃除はされたのだろうが少し空気が悪い気がした。あんな開けた場所で気持ちよさそうで寝ていたのだから、締め切られた室内は嫌いだろうとテラスへ続く窓を少し開けておく。
開けた窓から流れ込む風に吹かれて、ベッドの上で眠るネコの毛がそよそよと揺れる。
このまま一緒に眠ってしまおうかとそんなことを考えるが、それは叶わないと遠くから近づいてくるあわただしい足音に知ってしまう。ヴィルヘルムがネコを抱いて歩いていたという噂を早くも耳にした兄弟の誰かか、それとも同じく噂を聞いて話をせねばと思い立った父であるヴェストラ王によって走らされた家臣のどちらかだ。
部屋を離れた時にネコが目を覚まし、少し開けられた窓から逃げ出しはしないだろうかと少し不安になる。聞こえないとわかっていても僕が戻るまで待っていてねと、背中を撫でながら言えばそのぬくもりと優しい手が気に入ったのだろう、ネコは眠りながら少しだ

け擦り寄ってきた。
「あぁ、本当に……絶対に待っていてね」

扉を叩いたのは予想通りで、ヴェストラ王によってヴィルヘルムを呼びに来た宰相だった。
「お父上がお呼びです、ヴィルヘルム様」
用件は言わなくても分かるだろうと、豊かに生えそろった眉の下から覗く目が言外に告げている。
「あぁ、ネコのことだろう……行くよ」
断ってあのまま一緒に一眠りしてしまいたかったが、一目で気に入って連れてきてしまったけれど今まで一度も見たことも無い姿に、神殿に保護されていないネコ、何か秘密があるに決まっている。
だがそんな問題点を抱えているとわかっていながら、それでもあのネコがいいとヴィルヘルムは自分の腕にネコを抱いたのだ。
「しかし、皆が見たことも無いネコだと申しておりましたが……」
神殿からヴィルヘルムがネコを選んだと言う報告も無いし、むしろ神殿へ向かったと言う報告すらここ数年聞いたことが無い。ネコと言えば神殿に保護された存在であって、その場所以外でその姿を見ることはまず無いのだ。
「泉の傍にいてね……一目で気に入って連れてきた」
泉といえば城の裏手にある山に続く雑木林の中にある泉のことだと城にいる者ならば誰もが知っている。そして、その泉にはあまりいい噂はなく好んで近づく者と言えばこのヴィルヘルムぐらいなものだった。泉は善し悪しも無くものを隠しものを連れて来る、傍によればその力に引きずられどこへともなく連れていかれるかもしれない、小さな子供にも浸透するほどこの国では広くそして深く口づてに言い継がれている噂だ。
「またあの泉に行かれたのですか！？　あれほどおやめ下さいと、申したではないですか」

嘆かわしいと宰相は手をおでこに当てて苦虫を噛んだような顔をした。
「だが、あそこは静かで気持ちの良い場所だよ……それに一度だって隠されていないよ」
小さな頃から何故かヴィルヘルムはあの泉がお気に入りで暇があれば傍に行っては昼寝をしたり本を読んだりと色々してきた。噂は噂と、その身を案じて咎める宰相たちの言葉もどこ吹く風と未だに通い続けている。
「ですが！」
「ほら、謁見の間についた。父上をあまり待たせてはいけない、でしょう？」
重厚な扉の前に着いた途端、これでその話は終わりだとヴィルヘルムはにっこりと宰相に向けて笑った。

005

「よく来たな、ヴィルヘルム」

謁見の間といってもそこは少し広めに、そして他の部屋よりも豪奢に作られた部屋だ。その部屋の中央には一枚板でつくられた円卓が置かれ、謁見の間の警護を任された兵たちが壁際には並んでいる。

この謁見の間は国内の相手、つまり家臣である貴族や王族との話の場を設ける時に使われる部屋で、他国からの使者や賓客を迎える部屋とはまた違う。

部屋の奥側に据えられている細工の美しい椅子に腰をおろしているのは父であるヴェストラ王。傍らの王の腰掛ける椅子よりも華奢な椅子に腰掛けるのはヴィルヘルム達の母でありヴェストラ王の唯一のネコである。

この国の王族は伴侶にネコを迎え、例え王であろうとも側室を迎えることは無い。普通の国であればそれでは王家の血が絶えてしまうと懸念をするのだが、この国の王族……否、民の寿命を思えばそんな懸念は何処かへ霧散する。

「お呼びの件はネコのことでしょう、父上」

威厳を保ったまま座っている王と、それとは対照的に年頃を過ぎてもネコを得ず一人を通していた息子に漸くネコを得たと言う噂を聞いてニコニコ顔の母親。

ヴィルヘルムの兄弟構成は長男、二男、長女そしてヴィルヘルムと続き、その下には弟と妹が二人ずつの計八人兄弟であった。兄二人と姉には国を継ぐ意志はないからとネコを得て直ぐに王位継承権を破棄し、王から拝領した領地の領主となっているため城にいることが少ない。また、弟や妹たちが得ていたネコはまだ幼く、まだ人の姿を長く維持することが叶わなかった。

「そうだ、お前が漸くネコを得たと聞いてな……それは真か？」

兄二人も姉も王位継承権は既に放棄しているからこの国の第一王

位継承者はヴィルヘルムだ。ヴィルヘルムもネコを得たらそのまま王位を放棄しようかと考えていたのに、ネコを先に得ていた弟たちはヴィルヘルムを支える為に頑張ると言いだし王位を放棄してしまっている。まだネコを得ていない妹たちは幼すぎてネコを得るのはまだ先のことになりそうだ。それに、妹の一人はとても引っ込み思案で王位を継がせるのは酷だろうと言うことは上の兄弟たちで話し合っているし、もう一人に妹は人懐っこく利発な子とよく言われるが、その破天荒さからこちらも王位を継がせるのはと話題に上っていた。

つまり、兄弟たちの中では既に時期王はヴィルヘルムに決まったも同然で、両親や家臣、貴族たちの中でもそれは決定事項の様に扱われている。

上からも下からも王位を押しつけられた感の強いヴィルヘルムに決まったが、今まではまぁそれでもいいかと思っていたのだ。兄や弟たちが自分より劣るとは思ってはいない、むしろ兄たちは今すぐにでも王位についても遜色のないほどの実力や経験を兼ね備えている。なら、何故王位継承権を放棄したかといえば、それは得たネコを構い倒したいからに他ならない。

現国王も随分と王位を継ぐ際に兄弟たちと揉めたとは、最早他国に隠すことも出来ない程知られた話。王位を継げば、得たネコはおのずと王妃になる。ということは、王としての務めには同伴させ多くの人々の目にさらさせなければならないのだ。

領主の仕事も大変だが、王の仕事はもっと大変だ。平穏の続く世界だとはいえ、それなりの小競り合いもあるし、他国からの賓客をもてなすのは王の務め、他国に招かれればそこに赴かなければならないし、公私で時間を分けた場合、確実に公の時間が多くなり私の時間は少なくなる。

だから、ネコを早々に得た兄弟たちは自分とネコの時間を得る為に王位継承権を破棄したのかと、今になってようやく理解した。昔からどこか貧乏くじを引かされていた気がするが、今回もまたそう

なのかと少し頭を抱えたくなる。だからと言って、王位継承権を放棄してしまえばまだ王位継承権を放棄していない妹たちに負担をかけることになるので、それはしたくなかった。
「えぇ、まだ相手に了承は得てませんが……僕はあの子がいい」
まだ眠った姿しか見ていないけれど、あのネコを見てこの腕に抱いた今では他のネコを傍に置くことなど考えられない。
「そうかそうか、ならばそろそろ準備を進めてもよい頃かの」
噂を肯定すれば、それまで威厳を保っていた王の顔に笑みがさす。
「準備とは？」
嫌な予感がするとヴィルヘルムは思う。この国の始まりの頃からの決まりで、王位を継ぐ者はネコを得ていなければならないと言うものがある。そして、王位は王位を継ぐ意志のある者のみに継承を許されそれを放棄する者を咎めることは許さないといった決まりがあった。
ネコを得ていないからこそ、王位を継承することを受け止めていたヴィルヘルム。その彼がネコを得そうになった今、ここ数代で最もネコ馬鹿と称された父親のことだ王位継承の準備だと言うことは簡単に想像がつく。
「王位のことだ。私もそろそろ隠居生活をしたくてな……」
隠居生活に入って、妻とらぶらぶな生活送りたいんだという思いがダダ漏れである。しかし、ネコを得たとはいえ、まだ名前すら聞いていない。もしかしたら、ネコ側から断られることだってある。
「先ほど言ったでしょう、まだ了承を得ていないと」
気が早いとため息をひとつ吐く。
もしかしたらまた長きにわたって自分が欲しいと思うネコを探さなければならないのだが、きっとこの機会を逃せばもう二度とそんな機会が来る訳が無いとヴィルヘルムは思っていた。
「……ヴィルヘルム」
ずっと話を聞きながらほほ笑んでいた王妃が話しかけて来る。
「何ですか、母上」

「あなた達が唯一のネコに一瞬で惹かれるようにネコもまた惹かれるのよ、この人だって」
それは一瞬のことだ、触れられた瞬間にこの人だと、そう分かると王妃は言う。それは今ならヴィルヘルムにも分かることだった。以前、気になると思ったネコもいたがそれはただ単に気になっただけであって、今回の様に次を考えられなくなるほど気になったわけではないのだ。
「あなたのネコを連れて来る時、抱き上げたのでしょう？」
「えぇ」
眠っているネコをそのまま抱き上げて自分の部屋に連れて行った。眠る姿や頭を撫でれば擦り寄る素振りすら見せてくれる。
「ネコはねとても敏感な生き物よ、眠っていたとしても嫌だと思えば直ぐに目を覚まして逃げてしまうわ」
私だってそうだったものと、昔のことを思い出して笑えば隣に座っている国王が何やら表情を引きつらせていた。きっとその当時のことを思いだしているのだろう。
「だから、あなたの腕に大人しく抱かれて眠っていたのなら、大丈夫だと思うわ」
「そう、ですね……そうであることを願います」
そうであればいい、本当に心の底からヴィルヘルムはそう思った。

006

とりあえず、いったんは王位継承の準備の話は止めてもらうことにして、相手の了承を得てネコを得ることが出来たら王位を継ぐことを了承するという約束だけを取りつけられヴィルヘルムは謁見の間を後にした。

しかし、ネコはネコでも神殿に保護されていないネコ。そして今まで見たこともない姿をしていたがそれは噂の中にも盛り込まれているはずだ。だが、一言も両親はそこに触れては来ずただヴィルヘルムがネコを得たか否かそこに焦点があてられていた。

もしかしたら過去にも例があったことかもしれないし、ヴィルヘルムが見たことがないだけで今日見つけたあのネコの様なネコは存在するのかもしれない。

「あ、それは僕が頼んだものか？」

廊下を歩いていると、丁度向かい側からお盆にミルクを入れたチェイサーと銀の小皿を載せたメイドがやってきた。確か先ほどミルクを持ってくるようにと頼んだのもこのメイドだったはずだと声をかければはいと短い答えが返ってくる。

「ここまでいいよ、後は僕が持っていく」

どうせ向かう先は同じなのだし、心地よく眠っているだろうネコを起こすこともしたくない。自分なら、抱き上げても平気だった自分だったら多少物音を立てても平気だろうとメイドからお盆を受取る。少し渋ってはいたが、ネコをまだ一人占めしたいんだなんて茶化して言えば少し驚いた顔をして、王族たちのネコへの溺愛振りを思いだしたのだろう「では、確かにお渡しいたしました」と綺麗な礼を取って淀みない足取りで去ってゆく。

ヴィルヘルムが手を出そうものなら、これは自分の仕事だからと引くことのないメイドたち。なのにネコを絡ませただけであっさりと引きさがってしまい少し驚いてしまった。

「まぁ、確かに父上たちの溺愛振りは凄いからね」
きっと、そこに自分も加わるのだそう考えると何処か不思議な感じでヴィルヘルムは小さく出はあったが声を出して笑ってしまった。

部屋の前に着くとお盆を片手に持ち直してゆっくりと極力音を鳴らさぬよう扉を開く。戸を開いたことで開けていた窓との風の通り道が出来て心地よい風が出迎えてくれた。
さて、あのネコはまだ眠っているかなと気配を消してベッドへと歩み寄る。サイドボードにお盆をこれもまたゆっくりと置いて、振り返れば部屋を出る前にはそこで眠っていたはずの姿は無く息をのむ。
「あれ、どこに行ったんだ？」
何とも間抜けな声だと思いつつも、そんな声と言葉しかでなかった。もしかして開けた窓から逃げてしまったのだろうか、それとも扉から逃げてしまったのだろうか、そんなことが頭の中をぐるぐると回る。
「……外に出て他の奴の目にでも止まったら」
ぶつぶつと今城の中にいる王族の血を引く者の顔を思いだす。もし、この部屋から逃げ出していたとして王族の血を引く者の目に留まり先を越されてしまったらと考えると血の気が引く思いだ。
せめてこの部屋に、どこかに隠れていてくれればとヴィルヘルムは姿を消したネコを探し始める。
「おーい」
どこに行ったんだーとクッションを引っぺがしてみたり、タンスの裏を覗いてみたり、ヴィルヘルムは以前弟のネコが隠れてしまった時に探した様な場所を探し始める。冷静なつもりでいるが、どこか気は焦っていて足音が何時も以上に部屋に響く。
「にゃー」

一つ、聞こえた鳴き声にぴたりと足を止める。そして鳴き声の聞えた方向に振り返り力が抜けた様に膝をついてベッドの下をのぞきこめばそこには探し求めたネコがいた。
「お、こんな所に隠れてたのかい」
漸く見つけた姿に思わず頬が緩む。それにこちらの姿を見ても逃げる素振りも見せずじっとそのブルーサファイアの様な瞳で見つめてくる。お揃いの青い瞳、けれどネコの瞳の方がヴィルヘルムの瞳の色よりも濃い色をしていた。
「ベッドの寝心地はわるかったのかな」
ベッド下から出そうと手を伸ばしてもネコは逃げる素振りを見せず、その胸に抱けばどこかくつろいでいる様だった。そして、腕の中でどこか自分の安定する位置を探していたのか少し身体をひねった後、胸のあたりを撫でるように叩かれる。
目を合わせてくれたこと、伸ばした腕から逃げようとしなかったこと、そして腕の中に大人しくだかれていること……嫌われていると言うことはなさそうだと背を撫でる。
「僕の名はヴィルヘルム・エル・ヴェストラだ。君の名は？」
名を交換し、契約を結べばこのネコはヴィルヘルムの唯一のネコとなる。ネコもこの相手ならと思った相手にのみ名を教えるのだ。相手の目をじっと見て反応を待つが、ネコはヴィルヘルムの顔を見た……どこか目を見開いた感じで……まま動かない。
「君みたいな子は生まれてこのかた見たことが無いよ」
まだ緊張しているのだろうか、そう思ってそんな言葉をかけながら見事な毛並みを撫でる。絡まってしまいそうな印象を与えていると言うのに、指通りはなめらかでずっと触っていたくなった。少しでも相手の緊張がほぐれるようにとヴィルヘルムはまた笑いかける。
「ネコは好かないと思っていたけれど、君なら上手くやれるきがするよ」
今まで出会ったネコは大抵が気位が高く傲慢だった、中にはおっ

とりした子もいたけれどどこかヴィルヘルムとは合わなかったのだ。けれど、今腕の中にいるネコならばその姿を見た時からこの子だと確信めいた予感があった。

「だから、君の名を僕に教えておくれ」

名前を、最初に名を呼ぶ権利が欲しいと強く願う。

だが、幾ら待てどもネコは喋らず、真っすぐな瞳で見返してくるだけ。

そこには何処か困ったといった様な感情も浮かんでいてヴィルヘルムは少し首を傾げ名前ではなく別のことを尋ねた。

「えーと、もしかして喋れない、……のかな？」

007

「言葉は、理解しているようだね」
先ほどのヴィルヘルムの言葉を話せないのかという問いに、綾子は盛大にうなずくそぶりを見せ、言葉が話せないこと、それでも言葉は理解していることを必死に伝えようとした。
そして、その後いくつか質問されそれに答えたり、言われた通りの動作をしてみたりしてどうにか言葉を理解することを伝えることが出来たのだ。
「ネコは喋れるものだと思っていたけれど」
神殿に保護されているネコは一匹残らず喋っているし、弟たちの得たネコも小さいながら喋っている。姿も子供ではなく成熟しているようだが、子供でもこんな姿のネコなのだろうかとふと考えた。
「みゃー？」
猫が喋るなんて聞いたことないと、綾子は首を傾げる。どうも『ねこ』と同じ単語を使っているが、それに対する認識にずれがあるようだとヴィルヘルムを見上げる。姿の認識に対しては同じだが、それ以外の言葉については確実に違いがあった。
綾子の知る猫は今の綾子のようににゃーとかみゃーとかしか鳴かない。時折人の言葉の様な鳴き声を出す猫もいたが、それは人が発するほどはっきりとした言葉ではない。
だが、ヴィルヘルムの様子からして、彼の言うネコは人のように話し、それが普通だと認識されているようだ。
「どうしたら、言葉を喋れるようになるのかな」
ヴィルヘルムがベッドへ腰掛け、綾子はサイドテーブルの上にのせられ目線を合わせ意志の疎通をとっていたが、ヴィルヘルムは手を伸ばすとそのまま綾子を抱き上げ膝の上に乗せた。
一応のところは意志の疎通は何とかできるが、名を聞くことはできないままだ。文字も読めるのかと失敗をしてメモ用紙として置い

ていた紙に基本となる文字を書いて見せたがそれは分からないのか器用に首を横に振られている。
「その鳴き声も可愛いのだけれど、声も聞いてみたいな」
少し高めの鳴き声、どこか甘えた様な感じがしてそれも悪くないのだが自分の名前をその声で呼んで貰いたかった。
綾子はどうしたら喋れるかなんてわからずに背を撫でる手をふさふさとした尻尾で撫で返す。
まだ、この世界が何処なのか、元の場所に帰れるのか、レポートは大丈夫なのかと解決していない問題もあるのだが、目の前で少し寂しそうな顔をするヴィルヘルムには笑っていて欲しいと見上げた。
まだ一時間にも満たない時間しか一緒にいないと言うのに、その笑顔を向けられると赤面してしまうほど恥ずかしいというか何ともいえない感情を抱くが、この腕に抱かれているとどこか安心してしまうのだ。本当ならこの状況はもっと不安を抱いたり、心配をしたりとするはずなのに、この腕があれば大丈夫だと、何故かそう思ってしまった。
「慰めてくれるの？　優しいね」
喋ることができないことは綾子が悪いわけでもないのに、申し訳ないといった様な雰囲気で手を撫でる尻尾。一目見た時の直感はやはり正しかったのだと、そのまま思うままに抱き上げ抱きしめる。身い下でにぎゃーと悲鳴にも似た鳴き声がしたがその腕を緩める気にはなれなかった。
急に抱きしめられた綾子は目を見開いて、足を突っ張らせて固まっている。撫でられたり抱きあげられることにはこの短時間でなれたが、まさか抱きしめられるとは思いもしなかった。視界の端に映った尻尾がすごく膨らんでいて猫の様な運動神経は手に入れられなかったけれど、身体の構造は確かに猫なんだとこの現状から逃避するようなことを考える。
しかし、ずっと抱きしめられていると頭はだんだんと平静を取り戻してきて、突っ張っていた手はヴィルヘルムの肩へ、足はそのま

まだらんと垂らさせた。そして、ここまで相手に気に入られていて帰る方法を見つけたとして、帰れるのだろうかとそんなことを考える。

何故か知らないが、ヴィルヘルムからは好意しか感じられなくて、言葉を喋ることが出来ないとわかっただけでも綾子には落ち込んだ様にも見えたのだ。だとしたら、きっと帰れば二度と会うことのできない場所へ帰ると言ったら、どれほど悲しむのだろう……悲しまないという選択肢はなんとなく思いつかず、綾子は直ぐ近くにある顔を見上げた。

一目ぼれなんて信じていなかったけれど、もしかしたらその一目ぼれをしてしまったのかもしれない。

「にゃー」

惚れっぽい子が言っていた、見た瞬間これだと思うの、理屈とかそんなものどうでもよくて、ただその人の傍にいたいんだって。

文化は違う、言葉も違う、きっとファンタジーの中で繰り広げられている様なそんな世界が外には広がっているのだろう。元の世界には家族がいて、友達がいて、やるべき事が残っていて、戻らなければならないのにそれでも、この抱きしめてくれている腕から抜け出すなんてこと考えられなかった。

008

綾子がこの世界にきてから五日、特に喋れる様になったとか、何か身の回りで変なことがおこっただとか、そんな特異なことはなく平穏に過ぎ去っていった。

この五日で綾子がこの世界に対して理解したことは、ヴィルヘルムが話して聞かせてくれたこと、それから自分の目で見たことだ。少し窮屈だけれどと言って取り付けられた首輪にはヴィルヘルム固有の紋章が刻まれているらしく、城の何処を訪れても綾子の存在を咎めるものはおらず自由に過ごさせてもらっていた。だからこそ、メイドたちが話すことや、庭師や料理長たちの他愛のない話からもこの世界のことを知ることが出来ている。

まず、この世界はやはり綾子の予想通り綾子が生まれてこのかた育ってきた地球には存在しない場所であって、こちらの世界の地図にも日本はおろか別の国の名前も無かった。言葉に関してはやはり皆が喋る言葉は理解できるのだが、小さな子供が最初に習う文字でも綾子には理解が出来ず未だ意志の疎通を取ることに苦労している。

不幸中の幸いだが、何故か皆綾子が言葉を理解していることは知っているので、頷いたり首を振ったり、それから手で指し示すなどの動作でどうにか意志の疎通ははかれていた。

そして、この世界には電気やガスといったものはなく、綾子が生活する上で触れていた文明の機器と呼ばれるものは何一つなかった。だが、その替わりといってはなんだが、魔法が発達し国民全員が何らかの魔法を日常的に使っている。その中でも王族の持つ魔力は強く、その魔力をもってしてこの国に結界を張り、国のメインとなるライフラインを補っていると聞いた。

なんてファンタジーと驚き、まさかと思っていたが、綾子の視線に気がついたヴィルヘルムが目の前で簡単な魔法を見せてくれていたので、魔法の存在は否定できないものとなっている。そんな世界

だから、猫が喋れてもおかしくないのかと思ったが、時折ベランダに飛んでくる鳥は喋らないし、散歩がてらによった馬小屋では馬は綾子の知る様な馬しかいなかったのだ。

それに、ただ王子のお気に入りであって、珍しい猫であるからと言っても、綾子は自分が丁重にもてなされすぎていると感じていた。寝る場所は一日二日は抵抗してみせたものの、ヴィルヘルムの懇願やら他の場所へ行っても結局ヴィルヘルムの元へ連れ戻されてしまうことから諦めているが、ヴィルヘルムのベッドで眠っている。食事も王子と一緒に食事をとっていいのかと思ったが、当然のように用意されるのだからそれでいいのだろうと気にしないことにした。

ランドリー室に迷い込んでも、手入れの行き届いた庭を訪れても、調理場に行っても、誰も綾子を咎めはしない。王子のお気に入りであったとして、綾子が言葉を理解していると知っているからとして、そんなにも寛大に応対されるとどこか気持ちが悪い。これはやはり、この国の人と綾子との間で猫に対する認識のずれが言葉以外にもあるのだと、教えられた気分だった。

綾子はこの三日で定位置となりつつあるバルコニーで日向ぼっこをしている。ぱたぱたと尻尾を振って考えごとにふけっているのだ。

今考えていることは言葉が喋れたらいいのに、ということ。そうすれば意志の疎通も簡単になるし、何よりもヴィルヘルムの願いを叶えることが出来る。ヴィルヘルムはやはり綾子が喋り出すことを諦められないのか、今でもまだ喋れないかと尋ねていた。何故そこまでして名前を知りたいのか、その理由をヴィルヘルムは話していない。もしかしたら話すほどの理由では無いと思っているのかもしれないが、意図的に隠しているのかもしれないと地面を叩いていた尻尾が空に円を描く。

綾子から質問を投げかけることはできないから、必然的にヴィルヘルムが語ることしか聞けないのだが、その話題の中には猫のことも、何故名前を尋ねるのかと言うことも一度だって出てこない。ヴ

ィルヘルムに教えてもらったことはこの国や世界のことと、魔法についてのこと。そして、自分が次期国王であるということだった。
意図的に隠しているのなら、ヴィルヘルムの願いを叶えたいと言う思いだけで言葉が喋られるようになって名前を明かすのは危険だろう。だが、只単に名前を知りたいという理由だけだったら教えても構わないはずだ。
そう、これから仲良くしようとする相手に名前を尋ねることはおかしなことでは無い。現にヴィルヘルムは最初に名乗っているし、庭で偶然であった王妃からも自己紹介されている。それはこの世界でも相手に名を名乗ることが普通だとそう教えられているようだった。
けれど、言葉を喋れること、それは重要なことだ。今の綾子にとって相手に伝えられることはイエスかノーかそれだけなのだ。だから聞きたいことも聞けないし、詳しく聞きたくても話を掘り下げることすらできない。
言葉を喋られるようになったらきっとヴィルヘルムは名を今まで以上に尋ねて来るだろう、これは予想ではなく確証を持って言えること。だが、目的を明かすまで名前を告げなければいいのだ。
名を告げるか告げないか、それはきちんと知りたいことを尋ね、教えてもらってから結論をだしても遅くは無い。だって、もしかしたら名前を教える代償はとても大きなものかもしれないのだから。大きな代償があるのなら、綾子が疑問を覚えるほどの丁重な扱いにも頷ける。

綾子はヴィルヘルムに一目ぼれをしたのかもしれない。だって初めて顔を合わせた時よりも今の方がヴィルヘルムと顔を合わせると確実に綾子の心臓は早鐘を打つようになっていた。だからといって、この世界をとるか、生きてきた世界をとるか、それを直ぐに決められるほど綾子の気持ちはまだ傾いていない。
尋ねなければと思っていることはいっぱいある。それらをすべて

尋ねて答えを得てからでなければ綾子は動くことが出来ないと考えていた。感情だけで突っ走れるほどもう若くないとそこまで考えて……学生の綾子が羨ましいと言っていた姉が聞いたら怒りそうだとくすりと笑う。

何故この世界にいるのか、どうやってこの世界に来たのか、帰る術はあるのか、元の世界はどうなっているのか、今思いつくだけでも聞かなければならないことが次々と思い浮かぶ。気がついたらこの世界にいた綾子にとっては、どうして異世界へと来てしまったのか、そこから知らなければならないのだ。

それに、こういった異世界トリップでのセオリー的に魔力を使って戻る術があったとしても、その消費魔力は膨大なものになるのだろう。ならば、大きな魔力を持っていると言う王族の手を借りなければならないし、最悪ライフラインや結界を張る為に消費されている魔力を綾子の為に使ってもらわなければならない。

その影響と代償はどれ程のものだろうかと、想像するだけでもため息をつきたくなる。そして、そんな大きな代償を払ってまで元の世界に戻してもらえるかもわからない。

もしかしたら……否、そこまで考えて綾子はゆらゆらと動いていた尻尾を地面に下ろした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7218x/

猫が顔を洗った日

2011年11月7日20時09分発行